



Tokyo Gakugei University Repository
東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	山鹿誠次先生を偲ぶ(fulltext)
Author(s)	犬井,正
Citation	学芸地理(60): 3-4
Issue Date	2005-00-00
URL	http://hdl.handle.net/2309/87468
Publisher	東京学芸大学地理学会
Rights	



山鹿 誠次 先生

山鹿 誠次先生を偲ぶ

主な履歴

昭和18年	東京文理科大学地理科地理学専攻卒業
同年	海軍予備学生として海軍兵学校配属
昭和19年	海軍少尉，三重海軍航空隊奈良分遣隊教官
昭和20年	海軍中尉，海軍兵学校教官
昭和21年	国民図書刊行会勤務
昭和22年	文部教官，東京第一師範学校女子部助教授
昭和24年	東京学芸大学専任講師
昭和26年	東京学芸大学助教授
昭和36年	東京文理科大学より理学博士の学位授与
昭和42年	東京学芸大学大学院研究科担当
昭和47年	東京学芸大学教授
昭和48年	東京学芸大学附属小金井中学校長併任（昭和54年4月まで）
昭和55年	東京学芸大学定年退官

東京学芸大学地理学会名誉会員，東京学芸大学名誉教授山鹿誠次先生は，平成17年7月26日早朝に肺炎のため逝去されました。山鹿誠次先生のご偉業を偲び，謹んで哀悼の辞を申し述べます。

先生は大正5年，東京日本橋に生まれ，第一東京市立中学校（現都立九段高校），東京高等師範学校文科第4部（地理歴史専攻），東京文理科大学地学科地理学専攻に進まれました。東京文理科大学卒業後の，昭和18年から昭和20年9月まで，海軍兵学校教官（海軍少尉・中尉）になりました。兵役解除後の昭和22年5月に東京第一師範学校女子部助教授として赴任し，昭和26年6月東京学芸大学助教授となり，昭和47年1月に教授昇任されました。この間，昭和36年に東京文理科大学より，理学博士の学位を取得され

ました。昭和55年4月に東京学芸大学を定年退職されると同時に，獨協大学に教授として着任し，平成元年に同大学を定年退職されました。両大学在任中，東京学芸大学付属小金井中学校校長を8年間併任し，獨協中・高等学校長（獨協学園理事）を3年間勤めました。大学定年退職後は杉並区民大学に協力し，地域研究を生かし，生涯学習・社会教育にも貢献され，多くの地理愛好家を育てられました。

先生は江東の水の上生活者や，伊豆半島の自給製塩の研究など，フィールドワークに基づいた地理学・地誌学の基礎的研究をはじめ，ついで衛星都市の研究から，都市地理学への道を進まれました。日本経済の高度成長期における都市の拡大実態を精緻に調査し，その体系化研究の先導的役割を果たしました。武蔵野をはじめとした，東京近郊周辺都市の著しい変化を，「東京の衛星都市化」として把握し，都市地理学研究を内部の構造的のみならず，都市の機能的結合関係，いわゆる都市体系研究へ先導する画期的な研究であると評価され，これが昭和36年に取得した博士論文となりました。

その後，大都市圏の研究，応用的な諸都市の診断調査などを手がけられ，都市化理論の創成期に日本を代表する業績を次々とあげられて，日本の都市地理学発展に指導的な役割を果たされました。その間，著書22編，編著書8編，論文82編，分担執筆19編，監修4編に及ぶ輝かしい業績をあげられました。中でも，先生のご専門とされる都市地理学の分野では，『都市調査法』，『都市地理学』，『東京大都市圏の研究』，『都市の研究と診断』などが先生の代表的な著書であり，主編著の『日本の都市化』とともに，現在でも都市化研究者の必読書であり，後進にとって得がたい指針となっています。『都市地理学』は，平成5年に中国語に翻訳され中国で出版されているほど，現代においてもその輝きを失うことのない名著となっております。

先生は日本地理学会の評議員を5期勤められ，都市化研究委員会主査，集会，企画，編集の各委

員を歴任され、平成10年には、日本地理学会名誉会員となられました。また、日本都市学会理事を25年以上勤め、関東都市学会会長、科学技術庁資源調査会専門委員や、小金井市をはじめ多くの自治体の審議会委員などを歴任されました。このように先生の地理学界に果たされた貢献はきわめて大きなものがあります。

先生は偉大な学問的業績のみならず、学生に対しても、フィールドワークの大切さを説き、休日を利用した日帰りでの巡検や、講義時間を利用しての大学周辺の野外指導などを実践されてきました。先生の卓越した地域調査法と海外視察・調査によって培われた国際感覚、柔軟かつ寛容な人柄とユーモアのある語り口は、多くの学生を魅了するとともに、多数の地理学研究者や地理教育者を養成されました。

今ここに先生にお別れの言葉を述べなければならぬのは、まことに哀惜の念に堪えません。ここに山鹿誠次先生の数々のご偉業と学恩を偲び、ご逝去を心から悼み、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(犬井 正)